タイトル:「日ソ戦争」 帝国日本最後の戦い （全 290 ページ）
中公新書 2798
発行所:中央公論新社
発行:2024 年 4 月 25 日初版 2024 年 12 月 30 日 10 版

著者:麻田 雅文(アサダマサフミ)
1980(昭和55)年東京都生まれ。2003年学習院大学文学部史学科卒業。10年北海道大学大学院文学研究科博士課程単位取得後退学。博士(学術)。日本学術振興会特別研究員、ジョージ・ワシントン大学客員研究員などを経て、15年より岩手大学人文社会科学部准教授。専攻は近現代の日中露関係史。専攻は近現代の日中露関係史。本書により第 10 回猪木正道賞受賞。

第1章 開戦までの国家戦略 ―日米ソの角逐
1. 戦争を演出したアメリカ―大統領と米軍の思惑;
- ローズヴェルト大統領の願望:ソ連が日本を攻撃してくれること。理由は中国(重慶国民政府)の軍隊が頼りないため。ソ連は米英にビルマでの反撃よりも対ドイツに注力を要請。
- ソ連参戦の代償として、ローズヴェルトは大連をソ連に委ねることを提案。
- ヤルタ秘密協定(1944 年 2 月)米英ソスターリンは遼東半島全体の租借を希望するも、旅順のみに。モンゴルの現状維持、満州の鉄道は中ソ共同経営に戻す。
- アメリカ兵の犠牲を極力抑え、日本を無条件降伏させるためにソ連を参戦させる。
- ローズヴェルト大統領が病死、トルーマン大統領が対日戦略を継承。原爆開発が成功した後も、米軍はソ連の参戦を望んだ。
- ポツダム宣言はソ連抜きの「米・英・中・三国宣言」、日本政府は、ソ連は終戦を仲立ちする気を捨てていないと都合よく解釈し、ポツダム宣言を「黙殺」。結果としてソ連が降伏前に参戦できる状況に。原爆攻撃で日本の降伏が早まると予想し、ソ連は参戦を早めた(8 月 7 日)。
- 三発目の原爆投下は 8 月 24 日の予定だった。

2. 打ち砕かれた日本の希望　―ソ連のリアリズム―

- 日本は日ソ中立条約（1941 年 6 月 22 日）を結んで 1941 年夏にベトナム南部にを占領。
- 無条件降伏を避けたい、「一撃講和論」が支持されるも敗北を重ねる。
- ソ連の仲介があれば条件付きの講和ができると期待。日本の領土をソ連に譲ってそれを日本に誘う案も存在した。
- ドイツが降伏し、日本はソ連に戦争終結のための仲介を依頼する外交へ転換。
- ポツダムでの米英ソの会談で、ソ連が受けた「天皇メーセージ」は曖昧な内容（なるべく早い平和の「克服」を願う）の扱いは争点にならず。
- 陸軍はポツダム宣言の拒絶を求めるも、鈴木首相は「ただ黙殺するのみ」と口にする。鈴木首相は、陸軍のクーデターにより本土決戦への突入を恐れた。
- 8 月 8 日午後 11 時（モスクワ時間午後 5 時）佐藤駐ソ大使が宣戦布告文を受ける。
- 外出が禁じられていたため、ソ連側に日本への電報の打電を要請したが、日本には届かず。
- 日本は、8 月 9 日午前 8 時に米英ソからのラジオ放送で、ソ連の参戦を知る。
- ポツダム宣言に対する再検討を行うも、阿南陸相は、無条件降伏ではなく、「国体護持」、自主的撤兵、戦争責任者の日本による処罰、日本本土は保障占領しないという四条件を主張。
- 8 月 9 日長崎への「新型爆弾」投下。
- 昭和天皇は「国体護持」の一条件でのポツダム宣言の受諾する決意を述べた。（8 月 10 日）
- 東郷外相はマリク駐日ソ連大使と 10 日午前 11 時 15 分から会談。マリク大使は日本への宣戦布告を読み上げ、東郷は「天皇の国家統治の大権」を変更しないことを条件にポツダム宣言受諾を表明。スターリンは無条件降伏でないために戦争を継続。
- 8 月 14 日午後 11 時、ポツダム宣言実施の用意が日本にありとスイス政府を通じて米英ソに伝達。15 日正午に「終戦の詔書」（玉音放送）

第2章　満洲の蹂躙、関東軍の壊滅

1.　開戦までの道程―日ソの作戦計画と動員

- 満州国には軍人を除き 149 万人の日本人が在住。軍人、軍属を加えると 200 万人弱の日本人。満州国は 4300 万人。満州国軍は関東軍の支配下。満州事変を「成功」させたのは石原莞爾。1943 年までは関東軍は 80 万人を維持。1944 年 9 月まではソ連極東に攻め込むことを前提としていた。南方の兵力増強のため、1944 年 2 月より関東軍より兵力を抽出。停戦直後の関東軍の兵力は 44 万人。
- 東京の大本営は 1945 年 5 月にソ連が 8 月末ころには参戦することを予測。しかし関東軍は本土決戦のための「捨て駒」に等しくされた。
- 5 月 30 日に大本営が関東軍に示した対ソ作戦を準備する地域は朝鮮北部のみで、満州は抜けていた。本土決戦の間、満州では勝利よりも持久戦でソ連軍を大陸に足止めする方針に。
- 朝鮮北部に近い通化を最後の砦とするも準備が遅れる。「敵にも、満州国官民にも、居留民にも、関東軍の健在をあくまで誇示しなければならぬ」ジレンマあり。「対ソ静謐」の国家戦略と「対ソ防衛」の関東軍の矛盾。
- ソ連は対ドイツ戦争中も対日戦の研究を継続。1944 年 10 月米英が対日作戦を説明。日本本土の北方からソ連の攻撃が必要とソ連を説得。翌日、ソ連が満州への作戦を説明。アメリカにウラジオストックに軍事物資の輸送を依頼し、アメリカが協力。スターリンの戦術は物量と兵力で圧倒すること。戦争の帰趨を決するのは、銃後の安定、軍の士気、師団の数と質、軍の装備、軍指導部の組織能力の五点。ドイツは 1945 年 5 月に降伏。ソ連軍の極東への移動は 1945 年 4 月 1 日開始、5 月以降本格化するも、将兵を故郷に戻す復員も同時に進めていた。8 月に極東ソ連軍は 174 万人に。日本への敵意を醸成するプロパガンダを実施。シベリア出兵、日露戦争を引き合いにした。

2. ソ連軍の侵攻―八月九日未明からの一ヵ月

- 1945 年 8 月 9 日極東ソ連軍の満州侵攻が始まる。モンゴル方面から、北方から、沿岸からの3方向から侵攻。
- 開戦後、日本は「皇土朝鮮を保衛」との命令（満州を放棄せよを暗に命じた）
- 西部の第3方面軍は奉天、新京への移駐。居留民よりも部隊の移動が優先され輸送は大混乱。

- ハルビンの第4軍は善戦。開戦が近いと予想、準備を進める。8 月 17 日の停戦命令まで陣地を死守。堅固な要塞が仇となり、終戦後の戦いは犠牲も多く無益だった。
- 満州東部の牡丹江では第5軍が一進一退。8 月 16 日に牡丹江がソ連軍に占領。20 日にハルビン攻略を命令。牡丹江からは5―6万人の民間人が脱出できた（小説『赤い月』）。ただし、軍人とその家族が先に脱出。職業軍人が早く脱出できたのは、民間人よりも早く情報を得ていたからとの見解。
- 虎頭要塞での籠城戦で、シベリア鉄道の鉄橋を破壊。ソ連軍は要塞の換気口より大量のガソリンを注入し、それに点火。虎頭要塞は 8 月 26 日に陥落。玉音放送は「謀略」とされた。
- ソ連は北京への進軍を中止。
- 制空権はソ連。戦車でもソ連製 T-34 が優位だったが、現場の将兵には知らされず、その中に司馬遼太郎もいた。「陸の特攻」自爆攻撃を全軍で推進。「兵員充足せるも、兵器皆無に近き軍隊を以て、作戦せざらるべからざりし関東軍の末路は悲惨なりき」（第1方面参謀の大佐）
- 「ソ連軍の諜報、謀略、地下潜行行為は優秀にて我方の遠く及ばざる所」（関東軍の参謀）
- ソ連軍は、平時には諜報活動、戦時には兵力と火力で圧倒。
- 関東軍総司令部は、開戦翌日に新京（首都）から通化に「転進」するも「日本戦史上一大汚点」と断ずる（参謀の中佐）。
- 大本営は、完全な停戦を押し付けることで、納得しない現地の軍が暴発することを恐れ、「積極侵攻作戦を中止すべし」との命令で停戦命令は発出されず。
- 8 月 16 日に大陸命（天皇の命令）で「即時戦闘行動を停止」する命令。
- アメリカがソ連に対して攻勢を止めようとしたが、ソ連政府は無視。
- スターリンが停戦命令を出したのが 8 月 18 日。
- 通信が途絶え、関東軍の多くの部隊はソ連軍と個別に停戦交渉をせざるを得なかった。
- アメリカは流血を防ぐのを第一としたが、ソ連軍は利権を確実に手中にするために、局地停戦よりも進軍を優先した。
- 9 月に入りようやく戦火が終息した。

3. 在満日本人の苦難

- 満州国への農業移民（屯田兵）の犠牲者が多い。土地を相続できなかった次男三男。終戦までの農業移民は32万人。襲撃者はソ連兵だけでなく（虐げられてきた）中国人も。
- 安部公房『けものたちは故郷をめざす』
- 瀬島龍三の弁明：「居留民の保護、一般治安の確保に当たる余力がなかった」と大本営に責任転嫁。日本人狩り；スターリンは 50 万人のソ連への連行をノルマ（ロシア語）とし、民間人も対象にされた。ソ連兵は略奪と強姦を繰り広げた。森繁久彌、宝田明、赤塚不二夫が体験。集団自決。望まない妊娠。男が未婚女性をソ連兵に差し出す「接待」。ソ連兵から女性を守るための女性を「婦人特攻隊」と呼称。
- 中ソ友好同盟条約　蒋介石の率いる重慶国民政府とスターリンは友好同盟条約を結ぶ（1945 年 8 月 14 日）
- 満州で勢力を拡大したのは中国共産党。

4. 北緯三八度線までの占領へ

- 日本は米軍が済州島を九州攻撃の基地とすると予測し、済州島に3個師団半、約 6 万人が集められた。その結果、朝鮮本土には4個師団半が残るのみになった。軍部は、朝鮮軍を関東軍の隷下に編入したいと上奏したが、昭和天皇は外国に駐屯する関東軍を日本の領土内の朝鮮半島の軍隊の指揮下に置くことを拒絶した（統帥大権の侵害を許さず）。
- 日本軍の主力は対米戦に備えて朝鮮南部に集結。手薄になった朝鮮北部にソ連軍が襲来。
- 朝鮮を米英ソ中（「四人の警察官」）による信託統治を構想（カイロ宣言 1943 年 12 月 1 日）
- ソ連軍は朝鮮を統治する青写真なかった。ソ連軍の関心は朝鮮北東部の港に集中。
- 米軍は日本本土を最優先として、ソ連が求める朝鮮半島への上陸の作戦は取らず。
- 日本軍は清津（朝鮮北部日本海）で頑強に抵抗。
- トルーマンからスターリンに 8 月 16 日に北緯38度線以北をソ連軍に降伏する地域に指定。
- 朝鮮北部を守る日本の第34軍はほぼ無傷で武装解除されたが、ソ連に連行された。

・　ソ連占領下の過酷な日本民間人、特に女性。平壌に 6 万人が滞留。38度線を越えられず。
・　五木寛之氏は自力で朝鮮北部より脱出。
・　1949 年 2 月、シベリア翼竜から解放された朝鮮南部出身の元兵士約 500 名が38度線を越えようとした際、韓国の国境警備隊が北朝鮮側からの連絡がなかったために、北朝鮮軍が進撃してきたと勘違いし、銃撃。この誤射で 37 名が死亡（家に帰るまでが戦争）

第3章　南樺太と千島列島への侵攻

1.　国内最後の地上戦―南樺太

・　米軍は東日本を爆撃する基地として南樺太に着目。ソ連は賛成するも具体的な話は避けた。
・　宗谷海峡は、米軍がソ連に物資を運ぶルートとして、戦略的価値を見出した。このルートで、日本海軍が 178 隻を抑留、9隻を沈めた。
・　ポツダム宣言の際に、米海軍が宗谷海峡を安全に航行できるように、ソ連に南樺太を占領するように督促するも、ソ連は満州にいる日本軍の撃破を優先し、サハリン南部への攻撃は第2波とした。
・　札幌市の第5方面隊は、米軍が千島列島中部と南部、道東を狙うと判断。ソ連よりもアメリカに備えていた。製鉄所のある室蘭にアメリカの艦砲射撃を受ける。
・　南樺太に師団の主力を布陣し、ソ連軍に有利な状況。
・　8 月 10 日に国境近くで戦闘開始。
・　札幌の第5方面隊は、南樺太に援軍を送らず様子見。
・　8 月 19 日に満州で停戦。南樺太は 8 月 22 日に停戦。
・　南樺太からの日本人の送還は 1946 年末に始まる。

2. 日本の最北端での激戦―占守島；

・　米軍による千島列島占領は「容認できない犠牲」をもたらすとして、幻に終わる。
・　上陸作戦の経験のないソ連軍は、アメリカ側に艦艇を要求し、1944 年 12 月に 16 隻が引き渡される。1945 年 4 月から 8 月にかけてソ連兵一万二千人がアラスカ州で艦艇やレーダーの訓練を受ける。アメリカはさらに 1945 年 5 月から 9 月にかけて 145 隻の艦艇をソ連に無償貸与。
・　8 月 15 日午前 7 時 40 分、ソ連軍は「日本の降伏が予想される。この好機を活かし、占守島、幌筵島、温禰古丹島を占領する必要がある」と命令。
・　千島列島の最北端の占守島とカムチャッカ半島の間の占守海峡は、アメリカからソ連への輸送船が通る海路であり、ソ連とは関係なしと、占守島の師団長はソ連の攻撃はないと油断していた。8 月 17 日、大本営から第5方面隊に「18 日 16 時までの自衛行動が可能」との命令。8 月 17 日よる、18 日未明にソ連軍が攻撃を開始、前線部隊はすぐに「自衛行動」に移り、戦闘が開始。
・　竹田浜に上陸後ソ連軍は島の北端に追いやられたが、午後 4 時に攻撃を中止。しかしソ連軍は戦闘をやめない。19 に大本営はマッカーサーに窮状を訴えるも、ソ連軍はマッカーサーの指揮下にない。苦戦するソ連軍は関東軍総司令部を通して停戦を模索。21 日に停戦を認めると第5方面隊から第91師団に指示。21 日に停戦が成立、24 日に武装解除。
・　強攻は愚策と悟ったソ連軍は、千島列島のほかの島は第91師団の幕僚を案内人とした。8 月 30 日得撫島（ウルップ）までの上陸を終え、戦闘は回避された。

3. 岐路にあった北海道と北方領土（国後島、択捉島、歯舞諸島、色丹島）

・　スターリンは、全クルリ諸島（千島列島）と北海道の北半分（留萌と釧路を結ぶ線の北側）を要求。狙いは港。スターリンはベルリンのように東京を分割占領を命令。24 日に予定されていたソ連による留萌への上陸をアメリカが制止。
・　8 月 17 日トルーマンはスターリンへ、北海道の北半分を拒絶。ただし、全クルリ諸島（千島列島）はソ連軍に明け渡すことに同意した。しかし、どこまでが全クルリ諸島かは示されなかった。スターリンは 22 日に北海道上陸の準備を止めた（中止でなく、待機）。北海道全部でなく、北半分とつつましくした要求にもかかわらず拒否されたことにスターリンは失望し、千島列島にアメリカの飛行場を提供することを拒否。
・　なぜ北海道を諦めたか　（研究者の意見は分かれるが）
　1）南樺太、千島列島での日本軍の奮戦
　2）朝鮮北部と千島列島をソ連が占領することをアメリカが認めた

3）ソ連がアメリカとの関係悪化を恐れた

- ソ連軍による北海道への上陸作戦が中止になったのが 27 日、翌 28 日に択捉島に上陸、9 月1日に国後島、色丹島に上陸、9 月 3 日に歯舞諸島を占領、その後「子クルリ諸島」と命名。
- アメリカは北海道を無事に占領できたが、千島列島をソ連に差し出した形となった。
- 米軍は千島列島をソ連に引き渡したことに怒り心頭。なぜなら、千島列島がアメリカを狙うミサイル基地として、太平洋で最適なため。

4. 日ソ戦争の犠牲者たち

- 日ソ戦争に参加した兵士はソ連軍がおおよそ 185 万人、日本軍も 100 万人を超える全面戦争。
- ソ連に抑留されたために、日本側の戦死傷者数は定かでない。日本の民間人は 24 万 5000 人が命を落とした。

第4章　日本の復讐を恐れたスターリン

1.　対日包囲網の形成

- 日本の復讐を恐れていたスターリンは四つの手を打つ
  1）日本の民主化の推進（ソ連は意見を通せず）、2）対日同盟網の構築（中ソ友好同盟）、3）南樺太と千島列島の併合（サハリン州）、4）シベリア抑留（57―61 万人のうち 6 万人が亡くなる）

2.　シベリア抑留と物資搬出

- 戦利品は中国人に渡さず、ソ連に、武器は中国共産党へ
- 日ソ戦争で損をしたのが中国国民党。ソ連軍が発行する軍票が乱発され満州でインフレが進行。

おわりに　―「自衛」でも、「解放」でもなく

ソ連を対日戦に引き込んだのは、アメリカのローズヴェルト大統領。その後のトルーマン大統領は最終的に原爆を重視したが、それまでは一方に賭けず、最後まで並行した。

ソ連の勝因

1）日本軍を凌駕する大軍を投入

2）モンゴル方面からの奇襲。日本軍にとっての「鵯越」（ヒヨドリごえ）

3）作戦の細部（戦闘）にスターリンが口出しをしなかった

日本の敗因

1）ソ連に和平の仲介を要請、「対ソ静謐」、軍上部はソ連が参戦の準備をしているのを知りながら、見て見ぬふり。

ロシアの「戦争の文化」；自軍の将兵の命を尊重せず、軍紀が緩い。停戦後の民間人の虐殺、性暴力、ソ連への強制連行。領土の奪取。

読後の感想：日ソ米の史実を元にした考証。終戦間際にアメリカが兵士の犠牲を抑制するために、ソ連の参戦を促し、物資を支援し、ソ連は領土の拡張を狙い終戦間際の時期を好機と捉え、満州、南樺太・千島列島への攻撃と、北海道占領の戦略と作戦の推移を、米ソ間の駆け引きを交えて解説。現在のアメリカとロシアの関係を理解することの一助となる。